

V. 支援教育研究

目 次

- 1 はじめに
- 2 すべての子どもが意欲的に学び 居場所を見つけられる学校づくり
- 3 通常の学級における支援を視点に入れた授業づくり
- 4 ユニバーサルデザインの授業・学級・校内体制づくり
- 5 ソーシャルスキルトレーニングを活用した社会性の育成

1 はじめに

1 支援教育の調査研究について

通常の学級においても、学校生活に困難がある児童生徒の個に応じた配慮・支援と、特別支援教育の考え方を取り入れた授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）、学級づくり（個のちがいを認め合える集団づくり）の実践が進んでいる。しかし教員の入れ替わりが多く、学校全体での支援教育への取り組みについての継承が難しくなっている。今年度は、支援教育研究協力校において、中学校では梅花女子大学 伊丹昌一教授、小学校では元神戸親和女子大学准教授 森田安徳氏にご指導をいただきながら、昨年度に続いてユニバーサルデザインの授業について研究すると共に、学校体制としての支援教育の継承について研究に取り組んだ。協力校の担当教員は教育センターの支援教育研究員でもあり、自校の取組みを市内各校に発信し支援教育を推進してくれるものと期待している。

2 研究テーマ

全体テーマ：「インクルーシブ教育をめざした授業づくりと持続可能な支援体制づくり」
各協力校の研究テーマは下記のとおりである。

A 中学校	「学校生活・授業のユニバーサルデザイン化の継承と発展」
B 中学校	「自分から声をかけられない生徒（関係をつくるのが苦手な生徒）に対する手立ての確立」
C 小学校	「ユニバーサルデザインの授業・学級・校内支援体制作り」
D 中学校	「小規模校の特性を生かした社会性を育成するためのアプローチ」

3 活動概要

支援教育研究員連絡会

月に1回程度集まり、各校の研究内容を交流し研究を深めていった。

- 第1回：支援教育部門研究会について
- 第2回：各研究による今年度の目標（研究テーマ）の設定を報告
- 第3回：各研究の研究テーマ及び進捗状況の報告・交流
- 第4回：教育センターフォーラムリハーサル
- 第5回：教育センターフォーラム

教育センターフォーラム

令和2年2月19日（水）に開催された第7回茨木市教育センターフォーラムにおいて、7名の研究員とが発表を行った。

2 すべての子どもが意欲的に学び居場所を見つけられる学校づくり

堀 玲奈

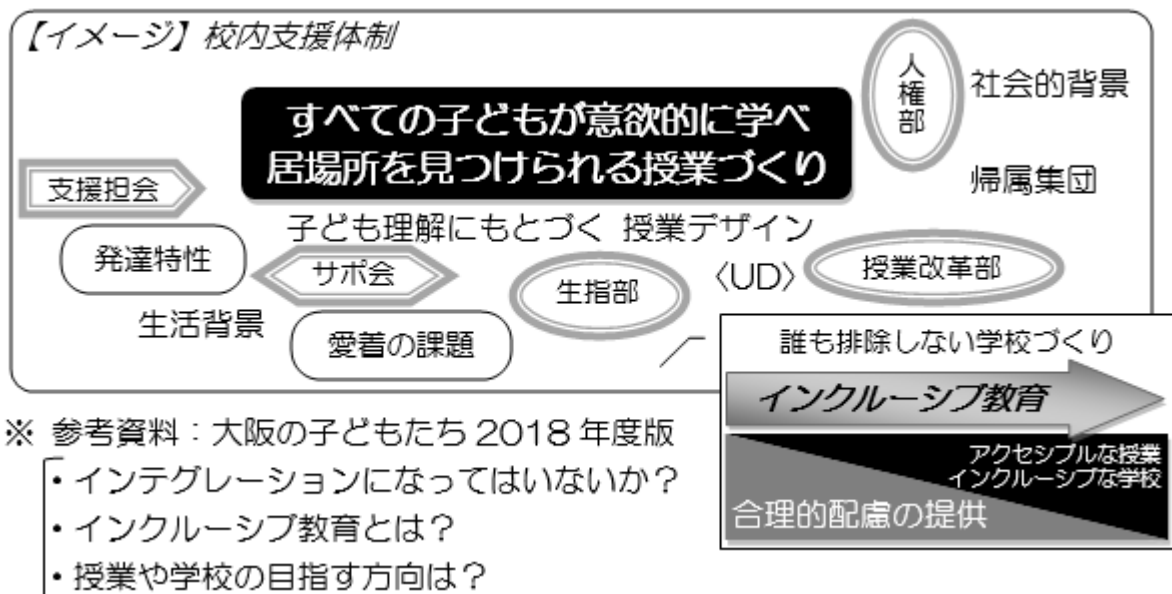
1 はじめに

本中学校区は「学びの共同体」を軸とした、聴き合い学び合い高め合う授業づくりを進めている。「一人ひとりの学ぶ権利を保障する（全員が学習に参加する）」という考え方に基づき、男女混合の4人班で協同学習を行う。すべての子どもが学びからこぼれ落ちないようにするために、教員は授業の中で、子どもと子どもをつなぐことを重視する。子ども同士をつなぐためには、子ども理解を基礎に授業をデザインすることが当然必要となり、子ども理解を深めるためには、子どもの実態をより正確に把握し、連携できるような支援体制が必要である。

2 取組み

(1) 生徒指導部との連携

これまでも支援教育コーディネーターは、推進会議・人権教育部会議・学習サポーター会議を通して情報共有や発信等を行ってきたが、今年度は特に、生徒指導部との連携に力を入れた。校内支援委員会で提案した校内支援体制は以下の通りである。生徒指導部会議に出席し、生徒指導部と連携して校内支援研修のテーマ決定などを行った。



(2) 峯本耕治弁護士による生徒指導・支援研修

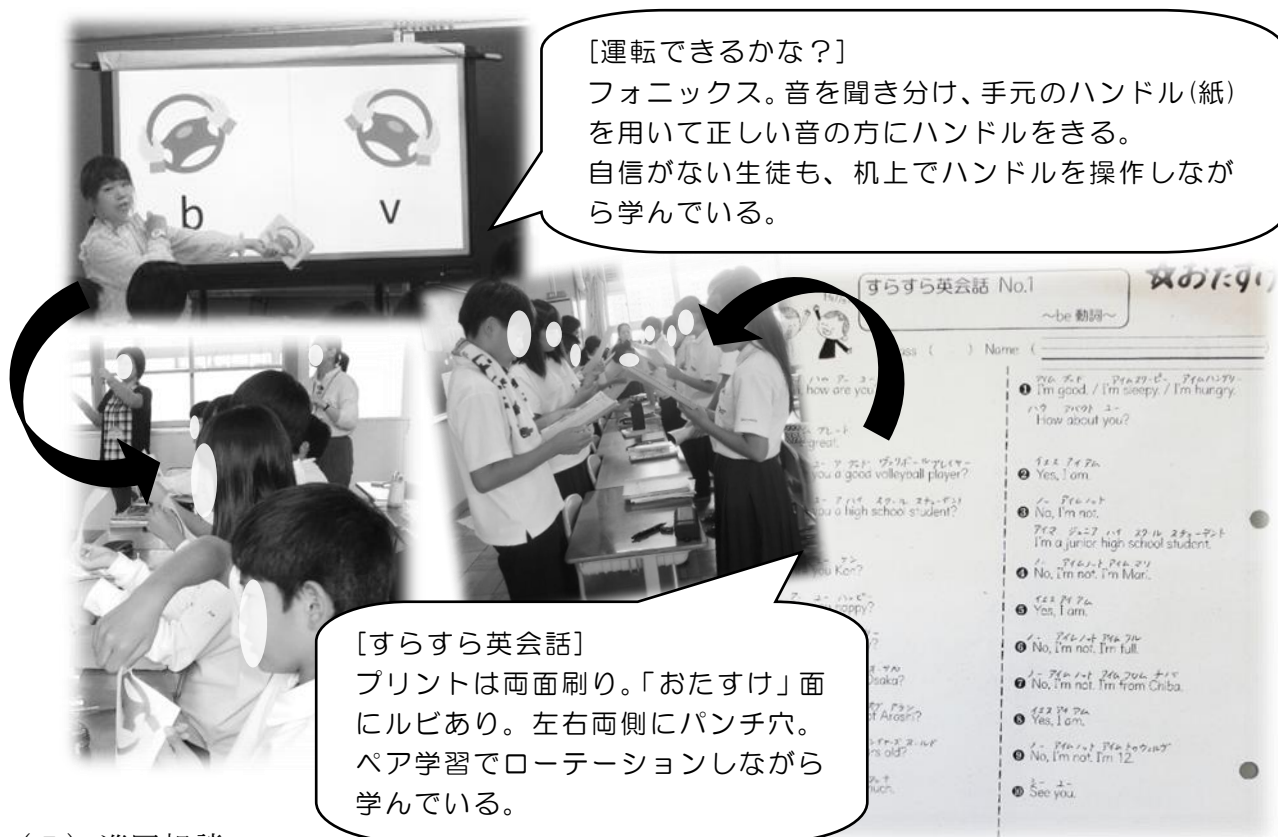
春の校内研修テーマは「愛着課題のある子どもへの指導・支援について～法的・危機管理視点からのアセスメント・プランニング・チーム対応・機関連携のポイント～」であった。見立てをせずにかかわることは、子どもにとって不適切な対応になる可能性があるため、見立てのもとに子どもにかかわることの重要性や、見立てをせず指導を行った結果、成果がでなかった場合には、教員に閉塞感が出てしまい指導が困難になっていくということを峯本弁護士から学んだ。

(3) 伊丹昌一教授による支援研修

夏は「愛着課題のある子どもの理解と支援」というテーマで研修を行った。障害の社会モデルの考え方、生まれながらの特性と二次的な行動を見きわめてかかわること、特性による愛着関係の築きにくさや支える保護者に寄り添うことの大切さ。外国にルーツがある子どものダブルリミテッドについてなど、講話内容は多岐にわたったが、子どもの幸せのために教育現場で何ができるのかを問い直す機会となった。

(4) 研究授業：1年生 英語「持ち主をたずねたり答えたりできるようになるよう」

今年度は、「ユニバーサルデザインの視点を生かしたすべての子どもが学べる授業づくり」をテーマに授業研究を進めた。秋には研究授業を行い、子どもたちの学びの様子から有効な手立てや授業デザインについて意見交流することができた。



(5) 巡回相談

子どもたちは、喜びや困り感を様々なかたちで表現する。行動や言葉の背景を知り、本人や保護者の思いに寄り添いながら、育ちを支援していくよう助言があった。巡回相談後には、学年を中心として支援方法やかかわり方を協議し、共通の認識を持って取り組むことができた。後の懇談で個別の指導計画作成につながったケースもあった。

3 取組みの成果と今後の課題

研究校としての1年目を終えようとしている。研修や子どもたちの姿を通して、子どもを中心に据えたユニバーサルデザインの授業づくりや支援のあり方について考える機会は増えた。しかし、新たな授業デザインなどに挑戦する中で、結果を急ぐあまり、形式的な“How to ～”に陥りがちな面もあった。このような反省を生かし、引き続き、子ども理解に重点を置き、取組みを推進する。

3 通常の学級における支援を視点に入れた授業づくり

山本 靖子

1 はじめに

本校は、茨木市の中心部から北側に離れた地域にある中規模の中学校である。茨木市内の多くの学校でも見られるように、ここ数年、本校では支援学級に在籍する子どもが増加している。障害の状況が多様化し、身体障害や病弱等、専門的な知識や配慮が必要な子どもが増加している。また、通常の学級でも、個別の対応が必要な子どもが増え、「今までの授業の進め方ではうまくいかない」という声が、教員から聞かれるようになった。そこで、今年度から支援教育研究協力校として研究を進めることになった。

2 今年度の取組み

特別支援教育アドバイザーによる巡回相談や講話を受け、すべての子どもに力をつけさせるためにどのようなことが必要かを学んだ。

3 支援を視点に入れた授業づくり

(1) 支援学級生の学習保障

本校の支援学級に在籍する子どもは、障害の状況と学習理解の状況に合わせて特別な教育課程を編成し、それぞれの課題に応じて、抽出授業を設定している。地域の中学校で地域の友達と過ごす時間を大切にするという視点も大切にしており、それぞれに必要な介助をしながら、通常の学級で授業を受ける教科では、授業担当者が教材を工夫するなど、合理的配慮を提供している。

ここ数年、通常の学級でのペーパーテストに対応が難しい支援学級生の評価について、合理的配慮だけでは対応ではきない状況が出てきた。これまでは支援学級生についても授業者が評価をすることを基本としてきたが、議論を重ねた結果、子どもの障害の状況により通常の評価方法になじまない場合は、支援学級担任と授業者が相談して評価することにした。

(2) 巡回相談

特別支援教育アドバイザーによる巡回相談では、通常の学級での授業の様子から「困っている子ども」への対応について助言を受けた。

「子どもの気になる行動は困っているサインだから、教員がそのサインに気付くことが大切である。その中で愛着障害のある子どもの行動面だけを見ると発達障害特性のある子どもと間違われることが多い。」とアドバイザーから教わった。

自分の気持ちを適切に表現できない、対人関係がうまく築けない、友達や先生との距離感が近すぎる、というような気になる子どもたちが本校だけでなく、どの学校にもいると思われる。愛着障害と聞くと親子関係の問題だと捉えがちだが、学校で対応できることはある。教員がしっかり認める、褒めることが信頼関係を築くことになり、これらの課題を解決に導くことができるとアドバイザーから教わった。

(3) 講話

特別支援教育アドバイザーによる講話を2回実施した。

障害のある子どもが障害のない子どもとともに学ぶ「インクルーシブ教育システム」は学びの場を共有するだけではなく、一人ひとりの学力を伸ばすことを考えて進めるべきだと、次のような助言を受けた。

①合理的配慮

- ・個別の支援が必要な子どもへの合理的配慮とは、障害のある子どもが他の子どもと同じように教育が受けられるように、学校が過度の負担にならない範囲で個別の状況に応じた配慮や調整をおこなうことである。
- ・教員と保護者だけでその内容を決めるのではなく、本人の意思表示を尊重することが大切である。

②学級集団づくり

- ・子どもが落ち着いて過ごせるように、クラス環境を整える。
- ・子ども同士が肯定的に認めあえるように、教員が日ごろから肯定的な言葉遣いをする。
- ・学び方の違いを認め合えるように、子ども自身が選択できる課題を常に用意する。

③自尊感情を高める

- ・子どもが認めてもらいたいときにほめる。
- ・友だちに良い評価をしてもらえる。
- ・ポジティブな言葉かけをする。

④教員も自分を大切にする

- ・大人が怒った顔では子どもの笑顔はない。

4 終わりに

本校の教員はそれぞれの子どもの状況に応じた「子どもがわかりやすい授業」を実践している。そしてそれを「当たり前のことをしているだけ」と思っている。今年度、特別支援教育研究協力校になったことがきっかけで、学年を越えていろいろな授業を参観し、参考になったという声を多く聞いた。それぞれの教員の良いところを共有し、本校のスタンダードとなる形を作れるように研究をすすめたい。

4 ユニバーサルデザインの授業・学級・校内支援体制づくり

西島 葉子

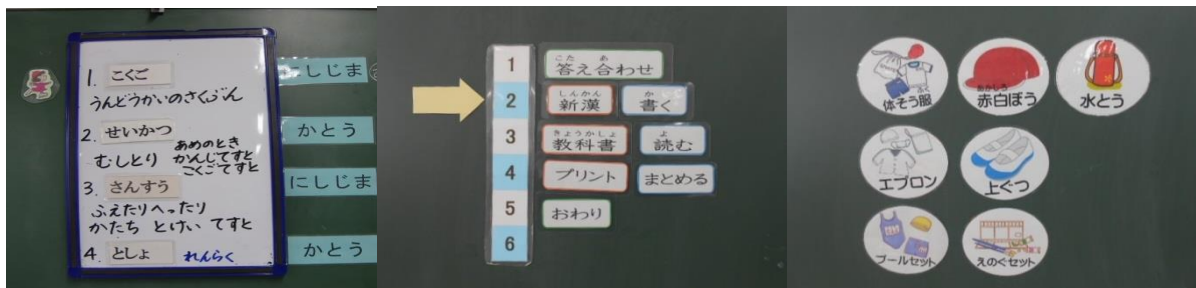
1 はじめに

本校はマンションや住宅が建ち並ぶ場所に位置する中規模校である。様々な課題を抱えた児童もいる中、昨年度から支援教育研究協力校となり、子どもサポート委員会を中心に「ユニバーサルデザインの授業・学級・校内支援体制づくり」をテーマとして、支援教育について考え、実践を行ってきた。

2 ユニバーサルデザインを推進する環境を整える

昨年度は、UD（ユニバーサルデザイン）の授業や学級づくりの基礎を学校全体で学び、アイデアを教職員間で交流し合い、実践してきた。今年度学校全体のスタンダードとして環境を整えるために、3種類の掲示物を全クラスに配布した。

- ① 1日のスケジュール ② 1時間のスケジュール ③ 持ち帰り・移動教室用



2学期末に使用状況アンケートを取ったところ、①と③の掲示物はほとんどのクラスで使用され、効果があるとのことだった。②の掲示物は、「小さくて見にくいので、大きくしてほしい。」との意見や、直接手書きしたり、独自に作っている教員もいた。③の掲示物は、体育館シューズやなわとび、リコーダー、けんぱんハーモニカなども増やしてほしいとの要望があった。要望を踏まえ、今後も改善しながら取り組んでいきたい。

3 校内研修

UDの環境を整えることも大切なことだが、なぜUDが必要なのか、児童理解の面から合理的配慮やUDの必要性について考えていきたいと考え、今年度の夏季校内研修では、「配慮が必要な児童の理解と支援について」をテーマに、2つの事例をもとにグループ協議を行った。事例は事前に先生方にアンケートをとり、実際にクラスで困っている児童の様子などを聞き取って作成した。研修会では、事例に出てくる児童の行動から、なぜそのような行動をとってしまうのか、原因やきっかけとなる部分について考えながら、手立てについて協議した。最後に、講師の森田安德先生（神戸親和女子大学准教授）から、児童の自己評価を高める対応についてのお話をいただいた。「事例を元に考えることができたので、具体的な原因や手だてを考えることができてよかった。」「色々な先生方の意見を聞けたし、自分自身を振り返ることができた。」などの声があり、次年度も具体的な事例を元に研修を行っていく予定である。

4 研究授業 ～2年 国語科「なかまになることばをあつめよう」～

研究授業では、支援学級在籍の児童も含めて、「誰もが参加できる授業づくり」をテーマに授業展開を考えた。始めに活動の見通しを持たせることや、様々な視覚支援、ワークシートや発表の時の話型の工夫、さらに、「やってみたい！」と思えるような意欲を持たせるしかけなどを考えた。これらを行うことで、支援の必要な児童も含め、全員が授業に意欲的に取り組むことができた。研究協議では、よい点として、「視覚支援が工夫されていた。」「先生の一方的な手助けだけでUDを作るのではなく、子ども同士の活動を取り入れて参加しやすくしている所がよかった。」などの意見がでた。課題点としては、「研究授業だったから準備をたくさんできた。普段の授業では準備が大変。教材を残していくなどの工夫が必要。」などの意見があった。

講師の森田先生からは、よい点として、「支援学級の児童を中心に授業を考えたところがすばらしい。」「授業のUDモデルがほとんどできていた。」、課題点として、「指導案の書き方について、(グループで協力する)(ふりかえりをする)だけではなく、具体的にどうするかまで示すことが重要。」などの助言をいただいた。

このクラスは、研究授業だけでなく、普段の授業でもUDの工夫や支援の必要な児童を中心とした学級づくりがなされている。普段からこれらの取組みを大切にしていくことの重要性もあらためて共有することができた。

5 授業のUDモデルチェックリストの活用

授業のUD化がどのくらいできているか、ふりかえるために、校内で「授業のUDモデルチェックリスト」を活用し点検した。集計し、チェックがあまりつかなかった部分について、森田先生からアドバイスをいただいた。今後も「授業のUDモデルチェックリスト」を校内で定期的に活用して授業のUD化をすすめていきたい。

6 個別教育アセスメント

支援の必要な児童のアセスメントと引き継ぎをより充実させるため、エクセルで個人ファイルを作成している。個別の指導計画や教育支援計画、引き継ぎ内容、アセスメントシートなどを6年分集約できるようにしている。昨年度は支援学級の児童分を作成していたが、今年度は通常の学級の児童についても作成をすすめているところである。

7 おわりに

2年間の支援教育研究協力校の取組みで、教職員の支援教育に対する意識が高まった。UDのアイデアを交流したことで、他の先生のアイデアを取り入れたり、「授業のUDモデルチェックリスト」にある項目を意識して授業づくりをすすめる教員が多く見られるようになった。その他にも、巡回相談を利用し、1年生でひらがな、2年生でカタカナの習熟度をチェックしたり、気になる児童について森田先生や相談員の先生に助言をいただいたりして、児童の支援に生かすことができた。

今後も学校全体で児童理解に努め、だれもが安心して過ごせるための、授業・学級・校内支援体制づくりを行っていきたい。

5 ソーシャルスキルトレーニングを活用した社会性の育成

岸田 風花

1 はじめに

本校は全校児童の少ない小規模校である。限られた人間関係の中で多くの時間を過ごすため、相手に伝わるように話すことや、初めての人とのかかわりをもつことを苦手とする児童が多い。しかし、卒業後は大人数の中で生活することになるため、中学校進学を視野に入れ、児童の社会性を育む取組みを行ってきた。一方、小規模校であるため児童全員の実態を把握しやすい。そこで、児童の実態に即した、みんなにとってわかりやすいユニバーサルデザインの授業づくりに取り組んできた。

2 今年度の取組み

支援教育研究協力校2年目となる今年度は、個別の教育支援計画の作成や小小交流を継続させながら、児童の社会性をより育むための工夫を行った。昨年度「教師と児童の距離が近いめについて教職員が手を貸しすぎてしまっていること」「授業中のルールが疎かになっていること」などの助言をアドバイザーからいただき、日頃から教職員が改善できるポイントを意識するようにした。また、今後大きな集団に入ったときによりよい人間関係が築けるようにソーシャルスキルトレーニングを授業に組み入れ、今後の生活に生かせるように取り組んだ。

3 社会性の育成のために

(1) 特別支援教育アドバイザーからの学び

①巡回相談から

昨年度の巡回相談から、児童数が少なく教職員と児童の距離が近いことによる課題が見えてきた。今年度は全教職員がその課題を意識して授業に取り組んだことで少しずつ改善が見られ、児童が考えたり言葉にして思いを伝える機会が増えた。今年度の巡回相談では、指導の成果と課題を確認することができた。成果があった点についてはどんな指導が効果的だったのか、成長のきっかけなどをまとめておくとよいことを教えていただいた。

②講話から

ソーシャルスキルとは『社会生活や対人関係を営んでいくために必要な技術』のことであり、5つのレベル(①自分について知る ②個人的ケアのレベル ③基本的なやりとりのレベル ④学校や地域でうまくやっていくレベル ⑤よりよいコミュニケーションのレベル)があることや、必要な条件、指導方法など、ソーシャルスキルの基本について学ぶことができた。それらを踏まえて事例検討を行い、具体的な児童の行動から効果的だと思われる声かけや指導について全教職員で考えることができた。ソーシャルスキルの基本や指導方法を教えていただいたことで、各学年での実践につなげている。

(2) ソーシャルスキルトレーニングの実践

年度初めに指導本を全教職員に紹介し、各学年に合わせて授業に取り入れようと提案した。実践したものは全学年を1つの表にまとめて記録し、引き継いでいくことで、6年間を通して効果的にトレーニングを行い、積み上げていくことができると考えている。

① 1年生『ふわつと言葉・ちくつと言葉』

日常の学校生活で「それってちくつと言葉やんな。あかんで。」といった言葉が児童から出てくるようになるなど、ちくつと言葉は、相手を嫌な気持ちにさせてしまうものだから言うてはいけないという意識が育っている。

② 3年生『自分の気持ちを伝えるスキル』

『相手を傷つけずに自分の意見を言おう』では、相手の意見を否定せずに自分の意見を言う「アサーション」という伝え方を学んだ。普段の遊びや話し合いの中でもその伝え方ができるように声をかけ合っている。

③ 6年生『感情をコントロールするスキル』

まず、『自分の感情や気持ちに気づこう』のトレーニングで自分への理解を深めさせた。『くやしさをエネルギーに』では、失敗しても努力した過程を大切にすればいいこと、いつまでも落ち込まず気持ちを切り替えた方がいいことを学んだ。『自分を好きになろう』では、周りの児童に自分のいいところを伝えてもらうことで、周りから見える自分の新たな一面に気づき、自信につながった。

4 ユニバーサルデザインを意識した授業づくりのために

(1) 教室環境の整備

(2) 授業のユニバーサルデザイン化

①指示の明確化②授業の構造化③心の落ち着きへの配慮④具体的な説明

5 おわりに

2年間の支援教育研究協力校の取組みを通して、全教職員が小規模校だからこそその課題を意識して、その改善に向けて実践できたことが大きな成果だった。特殊な環境だからできないのではなく、その環境を生かして、児童の実態に合わせて取り組んでいくことが大切だということをこの2年間の取組みを通じて強く感じた。今回、成果を実感できた取組みの一つであるソーシャルスキルトレーニングは、今後も継続させ、児童の社会性の育成につなげたい。